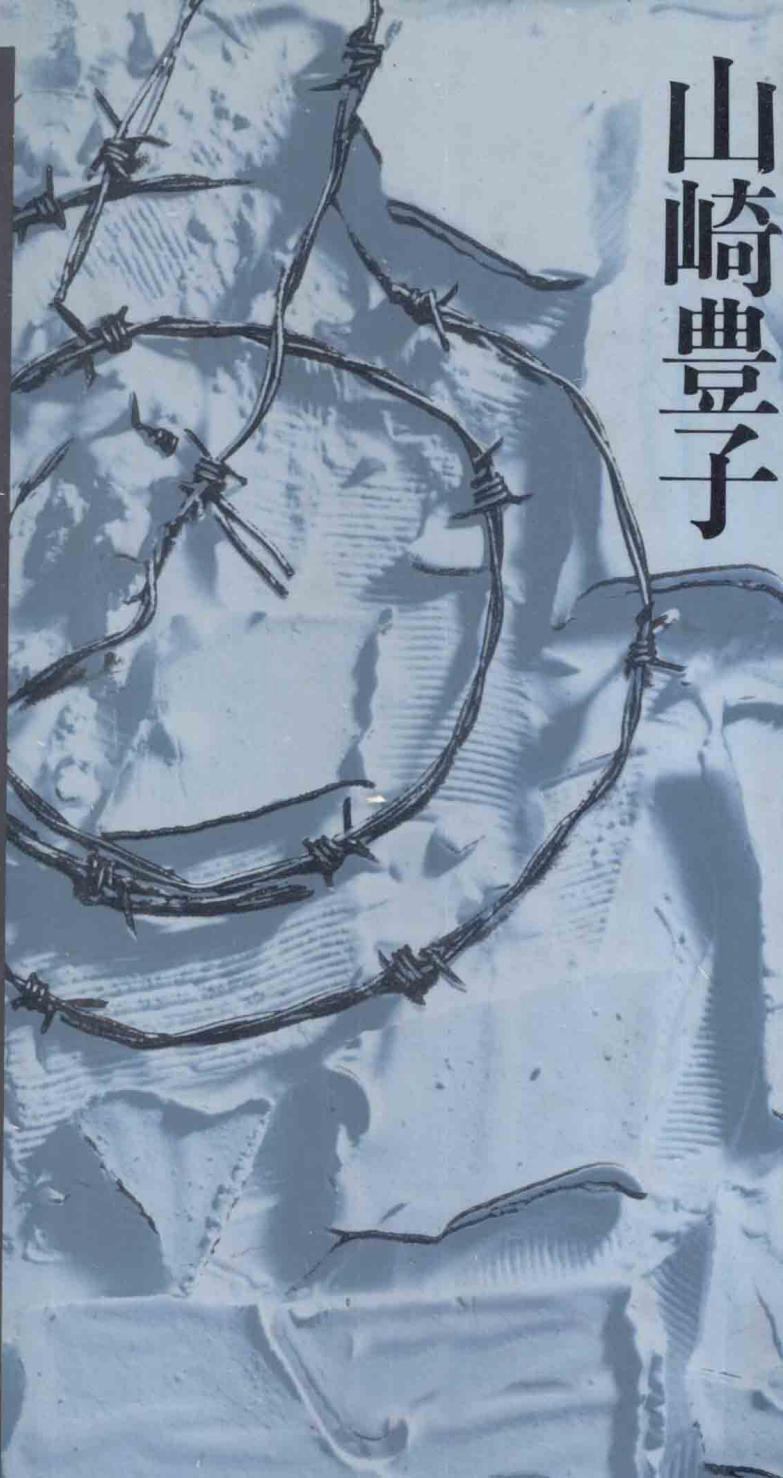
二つの祖国

下

山崎豊子



新潮社版

二つの祖国 下

崎豊子

二つの祖国(下)

昭和五十八年九月二十日 発行
昭和五十九年二月二十日 八刷

定価 一二〇〇円

著者 山崎豊子

発行者 佐藤亮一

発行所 株式会社 新潮社

〒一六二 東京都新宿区矢来町七一
電話(業務部)〇三-二六六-五一一一
(編集部)〇三-二六六-五四一一
振替 東京 四-八〇八番

印刷 株式会社 大日本印刷

製本 株式会社 加藤製本

© 1983 Toyoko Yamasaki Printed in Japan.
乱丁・落丁本は，御面倒ですが小社通信係宛御送付下さい。送料小社負担にてお取替えいたします。

ISBN4-10-322812-1 C0093

二つの祖国(下)・目次

一章　パール・ハーバーⅡ……7
二章　ワシントン・ハイツ……43
三章　仮面の法廷……81
四章　トージョー……144

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

五章　ノー・モア……193
六章　デス・バイ・ハンギング……250
七章　グッ・バイ……287

裝
幀

司

修

二つの祖国(下)

太平洋戦争は、数多くの哀しみと愛のドラマを生んだ。この作品は、当時の歴史的事実をもとに、小説的に構成したものである。登場する作中の主人公とその家族、友人などは架空の人物である。

一章　パール・ハーバー Ⅱ

東京の初霜は、例年になく早かった。
芝離宮恩賜庭園にも、玉砂利や枯芝にうっすら霜柱がたち、鳥の囀りも、まだまばらな早朝であったが、ばしっ、ばしっと強靱な矢音が響いていた。
庭園の池近くに戦前からの半ば朽ちかけた弓道場があり、白い稽古着を片肌脱ぎにし、黒の袴をつけた男が二人、弓をひいていた。一人は七十近い老人であり、一人は天羽賢治であった。
賢治は、弓に矢をつがえ、斜め打起しの動作から、十五間（二十八メートル）前方の的に向って、力一杯引きしぼった。力のバランスがうまくとれず、鹿皮の弽（手袋）をつけた右手が震えたが、充分、気合いの入ったところで矢を放つと、的をやや左にはずれ、突き刺さった。的は古畳に張りつけてあるから、畳に突き刺さる鈍い音がする。
弓を射る射位のあたりには、簀が敷かれているが、素足の指先は寒さで痺れ、片肌脱いだ肩も、暖房生活に慣れている賢治にはこたえる。
右隣りの黒足袋の老人は知らない人であった。道場にたまたま居合せ、賢治の方から一礼したきり、口はきかず、互いに自分の弓に没入しきっていた。
賢治は、古畳に突き刺さった自分の矢と、すべて的に的中している老人の矢を抜き、再び射位にたった。老人の弦から矢が離れ、霞的の真ん中に命中した。老人の視線、姿勢は矢が弦を離れた瞬間から微動だにせず、的に向って静止している。それは残心という射法の最後の作法で、老人の横顔には、気圧されるような厳しさが刻まれている。
賢治の脳裡に、鹿児島の加治木中学時代、教えを受けた老範士の俤がよぎった。
元島津藩、日置流範士だったその師から洗心、練心の弓道の極意を教えられた。学校外の『健児の舎』で叩き込まれた示現流の剣道は、相手を倒す攻撃あるのみの凄じい剣法であったが、弓道は相手が動かぬ的であるだけに、自分の心の状態が最も投影される武道である。
賢治は飴色に使い込まれたずっしりした弓を左手に持ち、的と一直線上になるよう両足を六十度の角度に踏み開き、土踏まずに重心をおろした。脊柱、首筋をまっすぐにし、呼吸を整え、矢をつがえて左斜め下で押し開いた弓を、頭の高さに打起し、的を凝視しながら力一杯、引分けた。ようやく勘が戻って来たせいか、十五間先の的がはっきり見え、気息が満ちて少しの震えもない。体と心と弓が一体となり、まさに発射の機が熟す。この間は自己との戦いで、

ちょっとした心の乱れが次の離れに現われる。弓が引きしぼられ、ぴゅっと冴えた弦音がしたかと思うと、矢は的に吸い込まれるように的中した。そのまま数秒、賢治は的を凝視し、作法通り弓を倒し、顔を正面に戻し、右足から静かに両足を揃えると、

「今の弦音はよかった」

傍らの老人が、はじめて口を開いた。

「はあ、ようやく」

自分としても、会心の射であった。

「日置流薩摩じゃな」

「おっしゃる通りです」

「うむ、足踏み、胴造りから弓構え、打起し、引分、会、離れと見事なものだ、相当やられたのだろう」

「中学から大学半ばまで修練しましたが、その後、全く無縁になり、なかなか勘が戻りません」

「いや、あと十射もかければ完璧、久々にいい弓を見せて貰った、では失敬」

老人はそう云い、片肌脱いだ袖に手を通すと、背筋のぴんと伸びた姿勢で去って行った。

賢治は再び的に向い、賓の上に正坐し、心を鎮めてから跪坐の姿勢をとり、吸う息で胴体を揺がさぬようにたち、弓に矢をつがえた。

賢治が再び、弓をはじめたのは、東郷被告の副弁護人である郷里の先輩、島木文彌の仮住いを訪ねているうち、法律関係の書籍の間に近代弓道の祖といわれる阿波研造範士の著書や、阿波範士に師事したドイツ人の著書『弓と禅』を、見つけてからだった。弓を引きたいと思いはじめると、矢も盾もたまらず、島木の手づるで弓、矢、弦、弾の四つ道具に、練習着、袴一式を譲り受け、都心に近い芝離宮恩賜庭園の弓道場を紹介して貰ったのだった。

鳥の囀り、羽ばたきがしきりと樹の間を渡り、霜柱も溶けはじめた。

やみくもに弓を引きたいという衝動に駆られたのは、モニターの仕事の重圧感から解き放たれ、平常心を取り戻したいという思いからかもしれない。

暫し一人だった道場に、数人の同好の士が現われた。賢治は弓道場を辞し、四谷の島木の家へ向った。

虎の門、赤坂をジープで走り抜け、四谷の島木の住いに着くと、ちょうど島木は粥を炊きあげたところだった。

「よかったところに来た、弓の後、朝粥と洒落てみんか」

いつも泊り込んでいる助手や書生たちが出払っているということで、島木自身が南部鉄の鍋を食卓に運び蓋をとると、寒い部屋に湯気がたちのぼった。

「これは恐縮です、ご馳走いないもす」

賢治は稽古着のまま、食卓に向い、島木がよそってくれた粥を両手で受け取った。

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

五時起きして道場へ駈けつけ、思いきり引いて来た後だけに、麦混りの粥とはいえ胃腑に滲みわたるほどうまく、ぜんまいや蕗の山菜も美味しかった。

「その恰好でジープを運転して来たのかね」

島木が箸を止め、はじめて気付いたように聞いた。

「ええ、虎の門、赤坂あたりはまだ人通りはありませんから――、もっとも、どこでMPに誰何されるかわからないので、IDカードと軍服は、風呂敷に包んでいますがね」

二杯目を自分でよそいながら云うと、島木は笑い出した。

「米軍の軍服とIDカードを風呂敷で包んで、ジープに乗って来たとは君らしい、それにしても、そうして稽古着で坐っている君の姿を見ていると、加治木の頃を思い出すな」

「島木さんにも、射礼を教えて戴きましたね」

「うむ、私が君の存在に気付いたのは、もとはと云えば、冬の道場に控えていた君の中にある剛と柔に瞠目したからだ」

「そう云われると、今日などはお恥ずかしい限りですよ、意地を張って昔通り素足で道場にたちましたが、寒くて指先がかじかみましたよ」

賢治は、加治木中学時代の寒稽古を思いうかべた。まだ暗いうちから弓道場に灯りを点し、凍てついた地面に素足でたち、弓を引くのだった。誰かがせめて藁草履を履くことを許可してほしいと申し出たが、老範士は寒さに耐えるのが修行だと一喝し、許さなかった。そのため冬の間は霜焼どころか皸が絶えず、地面を踏みしめると血が滲み、雪や霜のおりた朝は、点々と血模様が出来た。それでも誰も辞める者はなく、寒稽古が終ると、皸に効くという烏瓜を取りに山へ入り、真っ赤に熟した烏瓜を潰して塗ったものだった。

「今年の冬は郷里も寒くなりそうだな、ひょっとすると正月の床の間は、雪松になるかもしれないな」

島木は郷里に思いを馳せるように呟いた。南国とはいえ冬の加治木の気候は厳しく、朝鮮半島から渡って来る季節風は凍るように冷たく、雪も降る。土地の風習として、正月は真っすぐ伸びた松を一本だけ、大振りの花瓶に活け床の間に飾るが、年内に雪が降ると、松の葉に綿をのせ、雪松として賞でるのだった。

玄関の戸が開き、

「島木、いるかね」

よく響く声がした。

「ああ、こっちだ、上ってくれ」

島木も気さくに声を返すと、がたぴし軋む廊下を渡って、島木と同年輩らしい年恰好の男が入って来た。鶴のような痩身にベレー帽が瀟洒として似合っていた。

「朝粥だが、どうかね」

島木が勧めると、男はベレー帽をとり、

「すませて来たよ、それより熱いお茶を貰おうか」
よほど親しい間柄らしく、無遠慮に云った。賢治が手もとの湯呑に茶をいれて出すと、
「おや、新入りの助手かね」
はじめて、賢治の方を見た。
「いや、彼は米軍中尉だ」
島木が云うと、男はほうっと驚き、袴をつけた賢治に見入った。島木は二人を紹介した。
米松というその男は、元海軍大佐で、開戦までワシントンの日本大使館付海軍武官補佐官として勤務し、開戦と同時に、野村大使、来栖特使らと共にアメリカに抑留され、昭和十七年に戦時交換船で帰って来たのだった。島木が賢治のことを簡単に紹介すると、米松は、
「ほう、君が東京裁判のモニターをねぇ、傍聴には既に数回、行っているけれど、君たちのような日系二世の存在には全く気付かなかった、そう云えば、時折、通訳の間違いを訂正する張りのある声が入ったが、あれは君だったのかな」
興味深げに聞いた。
「さあ、どうですか、モニターでも、誤りを見逃している箇所がなきにしもあらずで、百パーセント、適切な語彙を用いて正しく意味を伝えているか、心配ですよ、ついこの間も、『某大将は虚名の人であった』の〝虚名〟を通訳はエンプティー・ネームと直訳したので、反射的にモニター・ボタンを押したのですが、さて、どう訳したものか、すぐ適切な意訳が出て来ず、困惑しました」
「なるほど、ところで島木君――」
米松は、何か用談があるらしく、ちらっと島木の方へ目配せした。
「ああ、この天羽君なら大丈夫、私の郷里の後輩で、なまじの日本人より日本精神を持っていて、正真正銘、信頼のおける男ですよ」
島木はそう保証すると、米松は頷き、
「ブレイクニー弁護人のバランタイン証人に対する反対尋問はすばらしい、しかし、僕としては、アメリカが日本の最後通牒を事前に知っていたという点をもっと強調してほしい、この点は嶋田大将の個人弁護段階でも追及するべく、海軍の仲間が資料蒐集に奔走しているが、日米交渉の主役は、何といっても開戦時の東郷外務大臣だ、君からこのメモを東郷氏の弁護人のブレイクニーに渡してくれ、役にたつと思う」
「有難う、ブレイクニー氏も米国の戦争委員会や真珠湾調査委員会にあたって、実に精力的に資料集めをしているが、どうも日本サイドの資料が思うように取れなくて、今一つというところだから、何よりも喜ぶだろう」
島木は、厚いメモを受け取って感謝した。
「失礼ですが……」
黙って話を聞いていた賢治が口を開いた。

「アメリカが日本の電報を傍受していたことは解りましたが、一つだけ腑に落ちないことがあります、日本は、なぜ開戦を事前に通告しなかったかです、日本からの訓電が遅れた真相は一体、どういうことなんですか」

かねてから疑問に思っていたことを、虚心坦懐に聞いた。

「君のような日系二世にしてそういう風に思っているとは嘆わしい、和戦いずれかを決しかねていた日本は、十一月二十六日、支那、仏印からの全面撤退を求める苛酷なハル・ノートを突きつけられ、もはや戦うしか道がないところへ追い込まれた、われわれ海軍でも、軍令部と連絡を取り、万一に備えてワシントンの日本大使館の武官室にある暗号機の処分をしたんだ」

米松が唇に唾をためて話すと、島木は茶を啜りながら、

「それにしても、あの暗号機をどうやって処分したんだ、われわれはその頃、ベルリンからザルツブルクへ撤退していたが、暗号機の処分には苦労したよ」

「テルミットの粉末をかけて溶かしたんだ、当初、その粉もニューヨークで調達する手はずをつけていたが、大量に要ることが解り、怪しまれるおそれもでてきたので急遽、日本から送らせ、早朝、大使館の裏庭の樹陰の深いところで焼いたよ、夜の方が人目につかないという意見もあったが、煙を見咎められないのは、朝靄のかかっている明け方だからね、しかし予想以上にもの凄い勢で白い煙が濛々とたち上り、ひやひやものだったよ」

当時を思い起すように米松は話した。

「それにしても、百年間は解読不能と折紙付きだったあの〝九七式印字機〟暗号機が解読されていたとはねぇ」

島木が口惜しげに、嘆息した。アメリカが日本海軍が開発した新式暗号機の存在に気付いたのは一九三八年（昭和十三年）で、外交暗号も同様のシステムだと察知し、暗号解読の天才、ウイリアム・フリードマンに解読の任務を与えたのだった。さすがのフリードマンも一時、強度の神経衰弱になったというが、一九四〇年十一月に〝九七式印字機〟と同タイプの暗号機械の模造に漕ぎつけ、外交レーダーの威力を発揮するに至ったのだった。その日本外交の最高機密はパープル（紫暗号）と呼ばれ、機密保持と作業上の便宜のために、マジック（魔術）という秘匿名称が使われて、日米交渉に遺憾なく威力を発揮したのだった。

「ところでハル・ノートを突きつけられた後、日本側が出した対米覚書というか、最後通牒となるものは、いつ、ワシントンの日本大使館に到着したのですか、先日来の法廷での審理によると、日本の外務省の電信課では、対米通告文は長文なので十四部に分け、十三部までを中央郵便局経由で日本時間の十二月七日午前一時五十分に発信し終えたと云っています、そうすると、それら十三部の通告文の暗号通信は、ワシントン時間で六日の午後九時三十分頃までには受信されているはずですがね」

その辺のところが解しかねるように云うと、米松は、

「当時、私自身が見聞きしたことと、あとから聞いた話をつなぎ合せると、騙し討ちと云われる内幕は、こういうことなんだ、まず最初にワシントン時間の十二月六日、午後二時にパイロット・メッセージが入電した、その内容は、一、対米覚書を送る　二、その覚書は十四部からなる長文であるから一挙に送れないかもしれぬが、情勢は極めてさし迫っているので、電文は極秘扱いにすること　三、右覚書をアメリカ側に提示する時期については後刻知らせるが、訓電あり次第、何時でもアメリカ側に手交出来るように万端の手配をしておくこと、というものだ、予めこういう電信が入ったのだから、大使館内には非常時体制が敷かれて当然だが、大使館の連中はそうしなかった、つまり覚書の十三部までは十二月六日、土曜日の夕方にワシントンの大使館に入り、通信員が午後十一時までに暗号機で解読したが、浄書しないでそのまま放置した、他の連中は夕方には退庁して、当直の電信官以外、誰もいなかった、実はその夜、パナマに転勤になる寺崎一等書記官の送別会があるためでもあったらしいがね」

「そんなパイロット・メッセージが入っているのに送別会でもないだろうに――」

島木が呆れ顔に云うと、米松は眼を据えた。

「全くだ、次の日、十二月七日、日曜日、僕は午前九時少し前に、大使館二階の海軍武官室へ出勤した、こういう非常時の状勢では、いつ、何が起るかもしれないからだ、ところが、大使館の入口の階段には、九時というのに分厚い日曜の新聞が山のように積み上げられ、牛乳瓶があり、郵便受けには前日の退庁後に配達されたらしく、蓋も出来ないほど電報が詰っている、大使館はマサチューセッツ通りに面しているから、この様子は外からまる見えだ、私はすぐにたまっている電報を手に取ったが、その中に日本政府が十四部に分けて発信した対米覚書の最後の第十四部と、午後一時通告の訓令が入っていた、私は最初は、この大使館入口の不様さは敵をあざむくための深謀遠慮かとも思ったが、事実は土日曜は休みというアメリカ式の習慣が身にしみついての様だった、大使館の奴、たるんどると腹がたち、電報の束を大使館、陸、海軍武官室に仕分けて配ったが、当直員は見当らないし、まだ誰も出てきていなかった、もっとも後で解ったことだが、当直の電信官は日曜のミサに出かけていたそうで、ともかく開いた口がふさがらなかった」

米松は、その時の腹だちを思い出し、顔を朱奔らせた。

「で、大使館員は、何時に出て来たんだ」

島木が聞いた。

「それがやっと十時頃になって、ぼつぼつ現われたが、前夜の送別会の二日酔いで、どいつもこいつも、寝ぼけ眼で、ハル国務長官に手交する時間が午後一時とあって、大騒ぎになり、動転したが、タイプが打てる者は、庶務担当の奥村一等書記官しかいない、通信員が解読した通告文を成文

化し、タイプを叩きはじめたが、なにぶん、素人のタイプだからミスが多く、時間はどんどん過ぎて行くばかりだった――」

「そういう場合に備えて、専門のタイピストを確保しておくというような術は、うてなかったのかねぇ」

「そこだよ、外交官だった君に悪いが、私は大使館の連中のセンスを疑うよ、まさか日曜日に最後的な通告文を手交するはずがないと頭から決め込んでいたらしい、予めパイロット・メッセージが入って、いついかなる時でも手交出来るようにという訓電が来ているのだから、たとえ機密文書はタイピストに打たせてはいけないという規則があっても、臨機応変に熟練したタイピストを確保しておくべきだった、そして開戦になるまでその身柄を拘束しておけば、機密は洩れずにすむわけだ」

「全くその通りですね、それにしても、そんな状況の中で、ハル国務長官に面会のアポイントメントを取らねばならなかった野村大使の心中は、大へんだったでしょうね」

「何しろ十三部のタイプがまだ打ち終っていない午前十一時に、大使は、東京からの訓電通り、午後一時にハル長官との会見を申し入れた、だが、十二時半になっても全部のタイプが仕上らないので、恥をしのんで午後一時四十五分まで延期を申し入れ、玄関に車のエンジンをふかしっ放しにしてタイプの仕上りを待った、そして飛び出して行ったのが、一時四十五分過ぎ、国務省に着いたのは二時五分だったという、私は二階の海軍武官室から、野村大使の車がフルスピードで走って行くのを見て、胸がつぶれる思いだった……」

その話を聞いて、賢治は、ぐっと眉を寄せた。

「アメリカ側の対応とは、まさに雲泥の相違ですね、アメリカのマジックは、十二月六日、午後九時には日本の最後通牒の暗号文の十三部を解き、十四部と手交時間については七日午前九時半に解読してしまっている、そして同じく七日午後一時二十分にはパールハーバー・アタックが始まっているのです、その時間にワシントンの日本大使館ではまだタイプを打っていたなど、お粗末というような言葉ではすまされませんよ」

最後通牒が遅れたために、在米の十一万七千人の日系人がどれほどの辛酸をなめなければならなかったことだろう――。賢治は我慢ならぬ口調で云った。

「その通りだ、ヘーグ条約には、開戦前に必ず通告すべしという条項があるが、何時間、何分前とは規定されていないから、極端にいえば、通告一分後に攻撃してもかまわないわけだが、日本の通告は攻撃開始後一時間近くもたってからになってしまった、そのためパールハーバー奇襲は、無警告の騙し討ちという汚名を永久にかぶせられてしまったのだ」

米松は歯ぎしりし、島木も、賢治も黙り込んでしまった。

*

日米段階の検察側証人、バランタイン国務長官顧問に対するブレイクニー弁護人の反対尋問は、続行されていた。

連日の出廷で、バランタイン証人にはさすがに疲労の色が滲み出ていたが、外交官らしい身だしなみを崩さず、慎重な上にも慎重な答弁を繰り返し、大きな破綻を来たさないのは、さすが三十七年以上も、一貫して国務省で極東を担当して来たベテランであった。

先日の法廷で、あまりに峻烈な反対尋問の展開に、それでもお前はアメリカ人かと忠誠心を問うたキーナン首席検事は、発言台にたっている端正なブレイクニー弁護人を、憎々しげに見上げている。

今日は、日米交渉の最大のネックの一つである中国大陸からの日本軍撤兵問題が、大きくクローズアップされていた。

「さて、証人、あなたはこの問題に関する日本の政策は不変なるもので、交渉においても一歩も譲歩しなかったと云っておられますね」

「その通りです」

「国務省が日本の中国駐兵に反対する主な理由は、何であったのですか」

「理由は二つありました、一つは日本が駐屯せんとする地域、期間、兵隊の数に関して、日本の立場は漠然とし、はっきりした表明をしませんでした、第二は周知の事実でありますが、中華民国政府がかかる日本の行為に反対であったからです」

バランタイン証人は、冷やかに答弁した。

「日米交渉がハル国務長官と野村大使との間で、公式に行われる前段階で、日本側の岩畔大佐がアメリカの神父に説明した条件、立場から、日本は一歩も譲歩しなかったとあなたは云うのですね」

「確かに岩畔大佐が申しましたことは、それ以後の交渉においても撤回されませんでした」

「国務省は日本が中国における軍隊を即時、無条件ですべて引揚げることを前提として日本側と合意に達することは非常に難しい、不可能に近いと考えていたのではありませんか」

「そうです」

「私の諒解するところでは、この問題は十一月初めまで、大した進展を見せていませんでしたね」

「まあ、そうです」

「そこでお尋ねしますが、あなたの宣誓口供書の中で、十一月七日付の文書について、何も言及されていませんが、何か理由があるのでしょうか」

「われわれがこの文書を検討している間に、日本政府側からの傍受電報が入ったからです、それによると、中国から

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com